

素材がわたしに描かせている

紙あるいはキャンバスに、一本の線を描く。次はその線になぞるように次の線を引く、最後まで、この繰り返りで、作品は制作される。

シンプルな営みで描かれているように見える高島進のドローイングの作品には緻密な準備と、気の遠くなるような時間が費やされている。

「何かのイメージを表現するために描いているのではなく、鉛筆や、鉛筆などの素材の表現面を手助けするために描いています。素材のために描いたらどうなるのかということを考えています。」

クラシック音楽の世界では、タイトルに「ピアノとフルートのいたための音楽」などと付けて、その楽器の特性を考えた楽曲が作られている。

それになぞらえれば、高島の仕事は「鉛筆のための美術」とか「筆、インク、紙のための美術」というタイトルが付けられる。

実際に彼の作品にはそうしたタイトルが付いている。

自らの感情、思索的イメージを絵画にしようとするのではなく、素材の特性を、いかに引き出すかということで作品は制作される。

没個性のように見えるが、それに対しては「個性という言い方をすれば、素材の中にはいろいろな潜在力があると思いますが、素材のどこを強調するかで、個性が出てくると思います。僕の場合は太さが変わるということです。」

高島がドローイングに使うのは、筆、鉛筆、色鉛筆、銀筆、金筆、銅筆、真鉛筆で、それぞれ線を引き始めてから、太さが変わってくところが、表現の大切な要素になっている。

例えば、柔らかい色鉛筆の場合は、線を引く前に鉛筆削りで尖った芯にして、線を引きはじめ、線はだんだん太くなっていく。